

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 23 日現在

機関番号：31203

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370028

研究課題名(和文) ニーチェの「自然主義」 その成立過程と理論的射程をめぐって

研究課題名(英文) Nietzsche's Naturalism: Its process of formation and its theoretical range

研究代表者

齋藤 直樹 (SAITO, Naoki)

盛岡大学・文学部・教授

研究者番号：90513664

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の第一の成果は、「自然」あるいは「自然的身体衝動」の認識論的/存在論的基底性を論じたニーチェの一連の思想を主要な検討対象とし、彼が用いる「自然」概念の多義性をその成立過程に即しつつ分析しながら、ニーチェの思索の歩みの全体を「自然主義」の哲学として体系的に再構築したことである。

また第二の成果は、二〇世紀後半以降、哲学的言説の全体を新たな仕方で構造化している自然主義と反自然主義との対立を視野に入れながら、ニーチェ独自の「自然主義」が持つ現代的な意義を明らかにしたことである。

研究成果の概要(英文)：The first result of this research is that Nietzsche's philosophy was systematically reconstructed as a kind of naturalism through the examination of Nietzsche's arguments over nature or the natural impulse subsisting in our body and the analysis of his ambiguous diction in using the concept of nature.

And the second result is that the contemporary significance of Nietzsche's unique naturalism was revealed against the background of the present-day conflict between naturalism and anti-naturalism which gives the new structure to the whole philosophical discourse.

研究分野：近現代哲学

キーワード：ニーチェ 自然 自然主義

1. 研究開始当初の背景

『悲劇の誕生』から遺稿『力への意志』へと至るニーチェ思想の全体の中に、根源的自然から離脱するかたちで捏造された「反自然的秩序」に対する根本的な批判という一貫したモチーフを指摘することは、ひとまずはさして難しいことではない。このモチーフは1870年代初頭において、事物の必然的・因果的連関を前提とした「ソクラテス的世界観」、あるいは、同時代の形骸化した歴史主義が追究した「客観的な歴史世界」に対する個別的な批判という仕方でもまずは形をとり、80年代において最終的にそれは、純粹認識一般の対象としての「真理の世界」、ならびに、ユダヤ=キリスト教な「道徳的世界秩序」に対する全面的な批判へと発展していく (cf., *Friedrich Nietzsche: Sämtliche Werke*, Kritische Studienausgabe in 15 Bänden, Walter de Gruyter, 1980, Bd1: S.118, 288ff., Bd5: S.15f, 266ff. 以下、本全集をKSAと略記)。このような一連の批判において、そこへと立ち返るべき本来の領域としてニーチェが前提としていたのは、まずは「ディオニュソスの自然」あるいは「非歴史的=自然的生」であったし (KSA, Bd1: S.30ff, 252f.) 最終的には、「自然的情動」として「身体」に結節している「全体現象としての力」 (KSA, Bd11: 26<432>, 37<4>) であった。「自然」概念を中核に据えたこのような批判の準拠点を考慮するなら、ニーチェの思索の全体を (広義の) 「自然主義」とさしあたり呼ぶことができよう。

しかしながら、ニーチェの認識批判あるいは道徳批判のうちに見いだされる上記のような「自然主義」的特徴は、これまで数多くの批判にさらされてきた。

(1) その一つに、ニーチェが採用する自然主義的な諸前提が導く思想的帰結に関する批判がある。例えばハーバーマスによれば、ニーチェは、理性的認識の本質を「自然的欲求に基づく対象支配」と一義的に規定し、それゆえ、社会的解放を実現する「了解志向型の社会的行為」を支える「コミュニケーション的理性」の所在を正当に評価することができず、結果として、「ディオニュソスの自然との身体的融合」を夢想する、ある種の神秘主義的思想に留まっているとされる (cf., J.Habermas, *Der philosophische Diskurs der Moderne, Zwölf Vorlesungen*, Suhrkamp, 1985, S160ff.)。あるいはアレントはニーチェを、社会的=反自然的規範性を自然的事実に還元する「有機的思考の伝統」の起点に位置する者と見なし、そのような思考が一般的に有する暴力賛美的傾向を強く批判している (H.Arendt, *On Violence, Crises of the Republik*, A Harvest/HBJ Book, 1972, pp.171f.)。こういった批判的議論に共通して見られるのは、ニーチェ的な「自然主義」を現代の社会的・政治的文脈に

おいて展開することは不毛ないしは危険であるという観点である。

(2) 今一つの主要な批判は、ニーチェが採用する自然主義的な諸前提そのもののが、その実、超自然的な形而上学的原理に侵食されているという批判である。まずもってニーチェ自身の自己批判において言及されているように、初期思想圏において前提とされている「ディオニュソスの自然」の概念は「根源的一者」という形而上学的想定と不可分であるかのように見える (KSA, Bd1: S.17)。同様の観点から、例えばシュネーデルバッハは、初期ニーチェによる「歴史主義」批判を端的に「生の形而上学」と特徴づけているし (H.Schnädelbach, *Geschichtsphilosophie nach Hegel, Die Probleme des Historismus*, Verlag Karl Alber, 1974, S.80f.)。さらにハイデガーは、デカルトのコギトに代えて「身体」概念を中核に据えた後期思想圏もまた「主観性の形而上学」の埒内に留まっていると批判している (M.Heidegger, *Nietzsche II*, Verlag Günter Neske, 1961, S.19)。彼らの解釈を受け入れ、かつ自然主義を「超自然的な存在者を認めない立場」と捉えたとすれば、ニーチェの哲学はそもそも自然主義ではないということになる。

(3) また、自然主義をめぐる現代的な議論を俯瞰すれば、さしあたりそれを「超自然的な存在者を認めない立場」として一般的に特徴づけることができるとしても、その上でどういう理論的前提を採用するかについては多岐にわたる主張がある。その中でも有力なものとして、A. すべての人間の事象は経験心理学によって説明されるとする「心理学主義」、B. すべての存在者は自然科学的方法によって説明されるとする「自然科学主義」、さらには、C. 自然科学的方法を物理学に限定し、世界を構成する対象として物理的事物以外を認めない「物理主義」といった立場が挙げられよう (cf., W.V.Quine, *Ontological Relativity and Other Essays*, Columbia U.P., 1969, pp.82f., p.166.)。これらの主張を考慮するなら、ニーチェは前提A~Cのいずれをも完全な仕方では保持しておらず、その限りにおいて、彼の思想を厳密な (少なくとも現代的な) 意味での自然主義と呼ぶことはできないことになる。

2. 研究の目的

本研究は、以上のような批判を念頭におきつつ、「自然」あるいは「自然的身体衝動」の認識論的/存在論的基底性を論じるニーチェの一連の思想を改めて検討し、彼が用いる「自然」概念の多義性をその成立過程に即しつつ分析しながら、ニーチェの思索の歩みの全体を「自然主義」の哲学として体系的に再構築することを第一の目的として掲げた。

さらにこの試みと並んで、二〇世紀後半

以降、哲学的言説の全体を新たな仕方で構造化している「自然主義」と「反自然主義」との対立を視野に入れながら、ニーチェ独自の「自然主義」が持つ思想的ポテンシャルを現代的な文脈の中で評価することを第二の目的とした。

3. 研究の方法

上記2で掲げた目的を実現するために、本研究は、ニーチェの「自然主義」に対する上記1の批判をそれぞれ批判的に退ける次の三つの観点を研究の基本に据え、そのうえで、ニーチェ自身の公刊著作および遺稿群の体系的な再検討、ならびに、関連する諸文献の収集および精査を通じて、それぞれの観定の妥当性を具体的に論証しつつ、ニーチェの「自然主義」の成り立ちとその思想的ポテンシャルを明らかにすることを試みた。

ニーチェは「自然主義」者である【vs 1 - (2)】: ニーチェの哲学は当初から一貫して知識・道徳を「自然化」する意図に貫かれており、この試みを何らかの「形而上学」として特徴づける解釈は生産的ではない。とはいえ、この手続きが前提とする「自然」概念は多義的であり、これを明確に分析することを通じて、ニーチェの「自然主義」の多元的な成り立ちを解明しなければならない。

ニーチェの「自然主義」は政治的・社会的文脈に有意義な仕方で適用可能である【vs 1 - (1)】: 批判者たちはニーチェの「自然主義」がもたらす現実的な主張の危険性や不毛性を主張するが、それは彼の「自然化」の手続きのある一面だけを強調することによって成り立っている。彼の「自然主義」の多元的な成り立ちを全体として評価するなら、彼の思想が持つ倫理的な性格やその有効性が新たなかたちで示されうる。

ニーチェの「自然主義」は自然主義をめぐる現代的議論に一定の寄与を果たしうる【vs 1 - (3)】: ニーチェの「自然主義」は全体として、「自然化」の手続きの導入(70年代中盤)「自然科学主義」への近接(70年代終盤)それからの離脱(80年代)という軌跡を描いているが、この変化を規定する「自然」概念の変遷を分析することを通じて、自然科学主義あるいは物理主義へと収束しつつある現代の自然主義の歩みを批判的に超克する手掛かりを獲得しうる。

4. 研究成果

上記3の三つの観定のそれぞれについて、本研究は次のような成果を獲得した。

-1: まずは、ニーチェ思想の独自性を「意識的志向性」に先行する「自然的=身体的衝動性」の所在を主題化したことに認める、デ

イディエ・フランクら現代のフランス現象学者によるニーチェ解釈(cf., Didier Franck, *Dramatique des phénomènes*, Collection <Épiméthée>, Presses Universitaires de France, 2001.)を導きの糸としながら、ニーチェの「自然主義」の到達点が現代的な見地から明らかされた。具体的には、ニーチェによる認識や道徳の「自然化」の手続きの眼目は、「身体」を無意識的に作動する諸々の自然衝動のヒエラルキーと見なし、その頂点に位置するわれわれの意識的・合理的な認知活動を、そうした自然的衝動の側から再構成しようとする「身体的情動性の現象学」(cf., *KSA*, Bd11: 36<35><36>, Bd12: 7<9>)にあるという主張が、彼自身のテキスト(とりわけ1880年代の遺稿群)に即して論証された。

-2: 次に、初期思想圏(1870年代前半)における「悲劇論」あるいは「歴史主義批判」といった限定的な議論の枠組みの中に散見される「自然」に関する言及[ex. 「ディオニュソスの自然」(*KSA*, Bd1: S.32f., 557)「自然的生」(*KSA*, Bd1: S.257ff.)]ならびに、「自然科学主義」へと近接した中期思想圏(1870年代後半)において提示される「自然」概念[ex. 「心理学的自然」(*KSA*, Bd2: S.61f.)「生理学的自然」(*KSA*, Bd3: S.348)]をさらなる検討対象として取り上げ、それらを、後期思想圏における「身体的情動性の現象学」の見地から遡行的に評価し相互に関連づけることを通じて、ニーチェ思想全体を視野におさめた彼独自の「自然主義」の成り立ちが体系的に取りまとめられた。

-1: 現在のニーチェ解釈の主流をなす動向の一つとして、道徳的価値に関する「パースペクティヴィズム」を強調するポストモダニストの観点を批判的に廃棄し、ニーチェの「道徳批判」の要諦をその「自然主義」的な方法のうちに見出そうとする一連の主張があるが、そうした思想的潮流を代表するブライアン・ライター(Leiter)の議論を詳細に検討することを通じて、彼のニーチェ解釈の妥当性と限界が具体的に明らかにされた。ライターによれば、道徳的自然主義は「道徳の基礎を自然的事実や傾向性に求めることによって、道徳を経験科学的に探究されうる自然的世界の中に位置づけること」と規定されるが、ニーチェによる「価値転換」のプログラムは、まさしくそうした試みの一つとして解釈されることになる(cf., Leiter, B. & Knobe, J., *The Case for Nietzschean Moral Psychology*, in: *Nietzsche and Morality*, Oxford U.P., 2007.)。このような自然主義的なニーチェ解釈については、「力への意志」を単なる自然的事実として解釈することの是非について、あるいは、ニーチェが経験科学に対してとる距離の大小に関して、さらには、道徳を自然的基礎に遡行して説明することがそもそも妥当であるか否かをめぐって、批判的な議論が活発に繰り広げられているが、これらの論

点について、上記 -1 で分析した後期ニーチェの「自然」概念、とりわけ「全体現象としての力」(*KSA*, Bd11: 26<432>, 37<4>) と呼ばれる彼独自の総体的な「自然」概念に注目しつつ考察を展開した。

-2: また、ニーチェの「自然主義」をより広く社会哲学的文脈に位置づけながら、その現代的な意義についてより包括的に考察を展開した。具体的な比較検討の対象として取り上げたのは、フランクフルト学派第三世代を代表する社会学者アクセル・ホネットが掲げる「コミュニケーションパラダイムの人間学的実質化」という課題、すなわち、合理性を偏重するハーバースの「討議理論」の限界を批判し、身体が具える自然的情動性に根ざした他者への「共感」あるいはその「承認」のあり方を、新たなコミュニケーションパラダイムとして導入する必要性をめぐる問題圏である (cf., Axel Honneth, *Kampf um Anmerkung. Zur moralischen Grammatik sozialer Konflikte*, Suhrkamp, 1998, S.196f., 203)。コミュニケーション理論のこのような「自然化」の試みに対して、ニーチェ思想の中に見出される「自然主義」的な見地——例えば「社会的組織化に際して要求される「共感」には、その生ける部分が互いに共鳴している人間の身体が必要不可欠である」(*KSA*, Bd11: 43<1>) といった観点——が極めて独特かつ重要な寄与を果たす可能性があるという主張が、彼のテキストに則しつつ具体的に論証された。

-1: ニーチェの「自然主義」をより現代的な議論と接続する可能性を視野に入れつつ、ハットフィールドによる近現代ドイツにおける自然主義の展開に関する系譜学的研究 (Gary Hatfield, *The Natural and the Normative*, The MIT Press, 1990) あるいは、英語圏の分析哲学における自然主義の復権に関するキッチャーの歴史的研究 (Philip Kitcher, *The Naturalists Return*, in: *The Philosophical Review*, Vol.101, No1, 1992.) 等を主要な手掛かりとしながら、現代における哲学的自然主義の歴史的形過程に関する基本的な見地を獲得した。

-2: また、-1 と同じ意図から、アドルノの「自然史 (Naturgeschichte)」をめぐる一連の考察に注目し、その哲学的な内実とニーチェ思想における「自然」概念とを比較検討することを試みた (Th.W.Adorno, *Die Idee der Naturgeschichte*, in: *Philosophische Frühschriften, Gesammelte Schriften* Bd1, Suhrkamp, 1997, S.344ff.)。アドルノによれば、当の考察を主導する関心は、自然と歴史との二元論的な対立を廃棄し、それらの双方が批判的に相対化されるような新たな < 自然 / 歴史 > 観の理念を提示することにある。そのうえで彼は、ルカーチの『小説の理論』に見られる「第二の自然 (eine zweite Natur)」(cf., Georg Lukács, *Die Theorie des*

Romans: ein geschichtsphilosophischer Versuch über die Formen der großen Epik, Luchterhand, 1963, S.60) の中に < 歴史内在的自然性 > をめぐる問いを、ならびに、ベンヤミンの『ドイツ悲劇の根源』に見られる「墜ちた自然 (die gefallene Natur)」(cf., Walter Benjamin, *Ursprung des deutschen Trauerspiels*, in: *Walter Benjamin Gesammelte Schriften*, Bd.I-1, Suhrkamp, 1974, S.356) の中に < 自然内在的歴史性 > への眼差しを看取り、両者を「ラディカルな自然史的思考」の先達と見なしている。アドルノのそうした議論をふまえて、ルカーチ・ベンヤミンの < 自然 / 歴史 > 概念を改めて精査し、それらの概念が、ニーチェ思想のうちに見出される「生と歴史の布置」あるいは「第二の自然」といった概念と本質的な類縁性を持ったものであることが論証された。

最終的に本研究は、以上の個別的成果 (~) を全体として集約する仕方で、「自然」概念を主軸としたニーチェ思想の新たな統一的解释像を提示するに至った。加えて、そうしたニーチェ独自の「自然主義」のかたちは、単なる自然科学主義あるいは物理主義を超えた自然主義のあり方を模索する現在の哲学的あるいは倫理的な議論の展開に、極めて独特な視点から少なからぬ寄与を果たす可能性を有していることが示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

・齋藤直樹、「ニーチェの「自然主義」: その成立過程と理論的射程をめぐって (2)」アドルノにおける「自然史」の理念に関する一考察」『比較文化研究』(盛岡大学社会文化学会編) 第二六号、二〇一六年、六一~七八頁。

・齋藤直樹、「文化的差異の「了解」から「承認」へ コミュニケーション理論の人間学的拡張をめぐる一考察」『比較文化研究』(盛岡大学社会文化学会編) 第二五号、二〇一五年、三三~五二頁。

・齋藤直樹、「ニーチェの「自然主義」: その成立過程と理論的射程をめぐって (1)」『比較文化研究』(盛岡大学社会文化学会編) 第二四号、二〇一四年、五一~七六頁。

[学会発表] (計 1 件)

・齋藤直樹、「ニーチェの「自然主義」 その成立過程と理論的射程をめぐって」第一二回ニーチェ研究者の集い、大阪大学、二〇一六年。

[図書] (計 2 件)

・コンラート・パウル・リースマン (齋藤直

樹・齋藤成夫訳)『反教養の理論』法政大学出版局、二〇一七年、一～六、九二～二〇五頁。

・ウィルヘルム・ディルタイ『ディルタイ全集第10巻』(蘭田坦・竹田純郎編、齋藤直樹他訳)、二〇一六年、四二五～四五二頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

齋藤 直樹 (SAITO, Naoki)

盛岡大学・文学部・教授

研究者番号：90513664